

## ニホンザル被害対策について

### 本県のニホンザル被害の現状

本県のニホンザルによる農林作物被害額は減少傾向にあるものの、令和元年度で約4千7百万円に上り、作物の内訳は多い順に果樹、野菜、いも類、しいたけとなっています。

また、農林作物被害だけでなく、住宅街や通学路への出没など、人的被害も懸念されます。



民家の屋根を移動するサル

### サルの基本的な生態

- ・雑食性で植物性のものを中心に食べる。
- ・通常、日の出から日没までの明るい時間に活動し、夜間は動かない。
- ・群れは、10数頭〜100頭で、メスとその子を中心に構成され、一定の行動域を持つ。
- ・オスは成熟すると群れから離れ、別の群れに入ったり、離れザルとして生活する。
- ・通常、2〜3年に1回出産するが、栄養状態が良ければ毎年出産する。

### 人が怒らないエサ



収穫されない柿



廃棄された大根に群がるサル

**1 エサとなるものを放置しない**  
収穫しない果樹、廃棄野菜、水稲の二番穂など「人が怒らないエサ」は、サルを集落に寄せる要因です。集落内をエサ場にしないように見直すことが被害防止の第一歩です。

### 被害対策のポイント

ニホンザルは学習能力が高い動物ですが、人間の知恵には到底及びません。サル対策で重要なことは「ここに来てエサが食べられない」とサルに学習させることです。

	森のサル	里のサル
初産年齢	6〜7歳	4〜5歳
出産間隔	2年	毎年
当歳死亡率	約50%	10〜20%
増加率	5%以下	約12%

食べさせてはいけません  
「里(集落・農地)のエサ」

### 2 追い払いはみんなで根気強く

サルは、集落全体で組織的な追い払いが有効です。一方で、個人がバラバラに追い払ったり、特定の人だけが追い払い、多くの人が見て見ぬふりをしたり、農作物が食べられそうなただけ追い払うことが続くと、サルが「人は怖くなく、少し隠れていけば最終的にエサが食べられる」と学習し、却って人馴れが進みます。例え、一匹のサルでも手を抜かず、集落全体で連携して、集落の外まで徹底して追い払うことが重要です。

### 3 効果の高い防護柵で守る

農地に適切な防護柵を設置し、農作物を守ることに加え、集落ぐるみで取り組むことで、利用可能なエサを減らすことにもなります。

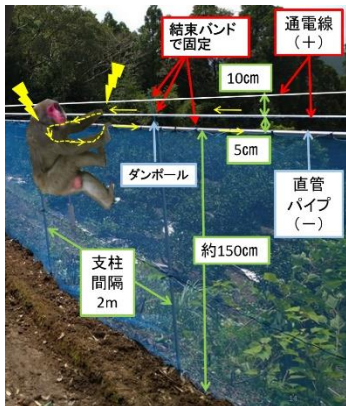
#### 〈防護柵設置のポイント〉

- ①サルがジャンプして柵を乗り越えないように、柵は周囲の樹木や建物などから3m以上離す。また、サルが手を伸ばしても中の農作物を盗られないよう、柵から離して植える。
- ②サルは柵をよじ登るため、ワイヤーメッシュ柵や金網柵(目合い10cm以下)の上に、電気柵を設置した複合柵が有効。(登らせて感電させる)

〈簡易複合柵「電落くん」〉  
埼玉県で開発された防風ネットと電気柵を組み合わせた複合柵です。比較的安価(800円/坪程度)で家庭菜園等でも設置が可能です。

### 4 捕獲対策

無計画に捕獲だけでも、捕獲を免れた個体が群れを維持するため、被害は軽減しません。対象となる群れを特定し、計画的な「個体数管理」とともに、加害レベルを軽減させる「被害対策」が必要です。



「電落くん」の仕組み※サルは合成

- 基本構造は、直管パイプで骨組みを作り、そこに防風ネットを垂直に張り、柵の上に通電線を張り渡したもの。侵入しようとするサルがネット柵を登り、一番上の直管パイプに前足を掛け、その上の通電線を押すと、直管パイプがアース(マイナス)となり、通電線からプラスの電気が流れるため感電する。
- 設置上の注意点  
ネット裾部はしっかりと埋め込む。  
管理上の注意点  
● 設置した日から24時間通電する。

被害対策に関する問合せ  
西臼杵支庁及び各農林振興局  
各市町村・各農協・各森林組合等

# ☆鳥獣被害対策地域特命チームだより☆

## 東臼杵南部地域

東臼杵南部地域では、地域を三つに分け「鳥獣被害対策リーダー研修会」を毎年開催しています。

令和2年度は、10月28日に諸塚村、椎葉村、美郷町の合同研修会、11月30日に日向市、12月18日に門川町の研修会が開催されました。

研修内容は、東臼杵地域鳥獣被害対策特命チームで役割分担し、普及センター職員や鳥獣被害対策センター職員の講義並びに防護柵業者の担当者によるワイヤメッシュ等設置の実演を組み合わせたものとなっています。先に映像や資料で鳥獣被害対策の考え方を学んでもらい、その後参加者全員が現地で実践する研修形式となっているため参加者も鳥獣対策のポイントを実地で確認しながら具体的に理解し、作業要領もスムーズに習得できていました。



①スライド事例と現場の違いを説明する参加者



②チームワークで設置実演に取り組む参加者

写真①は、門川町の研修会時のもので、現地の圃場条件により講義で説明のあった位置に柵を設置できない場合の対策を熱心に講師へ質問されている参加者の様子です。

また、現地実演では実際に使用する資材や工具の取り扱いのポイントを講師が繰り返し説明しても、実演作業では正しく実践できていない参加者も見受けられました。しかし、そのような時は別の参加者が正しい設置方法の手ほどきを率先して行ってくれたことから、間違っていない方法を習得していき、写真②は、そんな雰囲気を感じられる実演作業時の様子です。

東臼杵地域鳥獣被害対策特命チームでは、これからも充実した鳥獣被害対策リーダー研修会となるよう支援に取り組んでいきます。

## 北諸県地域

都城市高城町ではサル被害が増え、平成30年度からは国の鳥獣被害防止総合対策交付金を活用して、畑周辺の電気柵設置と、ロケット花火を用いた追い払い活動を行い対策を行ってきました。令和元年度以降も引き続き同事業を活用し、これまでの取組に加えて、大型捕獲檻を活用した捕獲の取組を始めましたので、今回はその内容について紹介します。

被害を起こしているサル群を狙った効果的な捕獲を行うために、サル群の行動を把握することから始めました。行動範囲の特定を行うために、動物位置情報システム（S社）を令和元年12月に試験的に導入し、1頭の雌ザルにGPS首輪を装着後、行動範囲の調査を開始しました。

その結果、被害を起こしているサル群の行動範囲は、高城町石山から山之口町六十田地区周辺であることが判明しました。

把握した行動パターンを基に、大型捕獲檻の設置場所や檻のタイプを設置地区の公民館、駆除を行う駆除班の意見も踏まえながら検討しました。その結果、大きさ4m四方で解体・移動も容易なK社の大型捕獲檻を導入することになりました。価格は約63万円です。

もし、檻を設置した地域のサルが檻を警戒するようになって、檻に入らなくなった場合は、檻を他の場所に移動させることも可能です。捕獲檻の組み立て設置、その後の餌の管理は地元公民館の住民が行います。

令和2年2月16日に檻を設置し、捕獲を開始しました。令和元年度の実績としては、22頭を捕獲しました。その後も同じ場所でも捕獲を続け、令和2年度には、30頭（令和2年4月～6月）の捕獲実績となっています。今後も、捕獲を行うだけでなく、地域の環境整備や、継続的にサルの被害軽減につなげていきたいと考えています。



GPS首輪を付ける様子



設置した大型捕獲檻の様子